

南海線沿線の踏切をわたると、町はぐつと特異なおおひらきを見せて来る。舞をつくのは軒なみに並ぶホルモン鍋からたまたま買突だ。屋でも夜でも、人間がごろごろしている。ゴミ箱のかげで酔いつぶれて寝て居る男、ウドンの玉を新聞紙に包んで立っただま食でている女、ズボンゼリシャツを二枚腕にかけて町角で売りつける立ちんぼの古着屋——南海本線のガードまで、一帯。たらずの四方にみろる。スラム街釜ヶ崎の顔である。釜ヶ崎とは行政区画上の町名ではなく俗名だから、どこからどこまで区釜ヶ崎といふのは、きりきりない

のだが、町名でいえば西成区の海邊町、甲岸町、東、西入船町の四町がまご中心。スラムは西成区の東萩町、今津町、山王町、東田町、区境をこえて浪速区の水崎町、馬場町、びろがり、これが釜ヶ崎の周辺となつて居る。ここにたゞれくらひの人間が生活して居るのが——正確な数字は昭和三十年の各戸調査で、中心部の四町あわせて約二十五万人といふのがありきり、それからふえても減ることはない。五七〇〇〇三万人はこえて居るだろう。うち一割程度は浪れこんでは消え、たえず流動する人口とみている。

この町に入りこおといふことは、通常の世間から隔離されるというこ

とである。生活基礎を失つた人々が、恥も外聞も捨てられる気安さは魅力だが、世間からは、釜ヶ崎の住人と相手にはされず、社会政策のうえからは保護しようにも、一手がつけられない」といふ理由で忘れられ、ただいに足が抜けなくなっていく。

ドヤのくらし

ドヤ、日払いアパートは二百軒以上ある。

古材木をつなぎあわせ、ペニヤ板で二疊か三疊の部屋を仕切り、どんどん増築される。最近のは一泊三十円、さすがに旅館とはいわづか、X、X、と看板がでて居る。畳もアンペラもなし板間に、よれよれの軍毯毛布を上と下と一枚ずつ貸してくれる。魚市場のマグロのよりに二通りと並ん

で身を横たえる。泊つて居るのは仕事にアブレつづけた立ちんぼ（職安を通さないでもぐりの労働者。せん者いわゆる、手配師。在道して仕事にありつく日雇い）がほとんどである。網は空が白おと同時に起きて、手配師をたよりに立ちんぼにゆく。

五十円から七十円だすと、山小屋

の寝床のように上下二段のカイコ棚式のドヤがある。東京ではヤッドハウスといふようだが、大阪ではせはりドヤだ。西成職安所に近いこの式のドヤでは、玄関を入るとすぐ暖湯があつて、前払いの宿賃を払ふ。まんな中に通路、裸電球がひとつぶら下がつて、両側にカイコ棚が並ぶ。うすいせんべいフトン、両横との仕切

りしてニヤ極で、板の破れを講談師のさしえペーシで發つてある。足右とにタナがあつて、そこに荷物とクツを置く。枕もとに灰落とし用のカン詰めの高きカン。これだけだ。二二になる。一晩や二晩の宿泊ではない。住んで行くのだ。人間ひとりよりやく休むのばせるだけの、ペニヤ板の「穴」の中に親子二人で住んでゐる父子もある。ほこんどが中年以上、脚安の失封労働者である。八十円だすと、三疊の「前」知屋、つまり三疊に二人寝るのだから、一人でゆくのだれと一緒になるかわからない。フトンは真冬でも上下各一枚だ。どつ口に入れる。ひと部屋借りさうとする二百五十円から二百円。

これならフトンも上下二枚になる。家族もちは、このひと部屋を借るか日払いアパート。または小屋に入る。南海電車のガード下や、ガードのコンクリート堀にへばりつくように、ずっと三百軒の小屋がある。二二に生活するものはおよそ二千人。三度三度米の飯をたべる愛はまかないといつて差支えなし。おかり、どうぞ、おこいも、戦時中の窮迫時代に、わたしたちに親切か。た食生活が、二二ではゴツゴツづいてゐる。脚安の日雇いが多いが、平均二十日就労で月収ざつと七千円。おかみさんにはトヤの洗濯師や布団のつくり、食堂の炊事といつた仕事があり、にあって、日に百円にはなる。

おさと収入面からはどんなに……と
思う。貧乏神は「小屋」である。

靖地獄の小屋

古板とトタン瓦張りつけ。窺ひとつ

満足にない小屋。三疊ひと間で日払い家賃が百円、四疊半で百五十円。一日単位で考えるときにしような錯覚に打ちいるが、月にすれば三疊で三千円、四疊半で四千五百円。アパートなみの家賃である。

この「日払い」というシステムが、貧しい人々を訪問させ、しめ上げるからくりなのだ。敷金、月家賃、いかに払う金は千円でも困る。日払いだからこそ、貧しい人々は入る。そして乏しい稼ぎはその日その日に家賃にさぼりあげられる。

家主は、スラムにどっしり腰をすえるボス達である。多くは市の道路予定地などにどんだん不法占拠のパラックを建て、既に事実として貧乏人に貸す。家賃のとりたてはアロツクごとに支配人のようなのがいて集める。日払いアパートや小屋を何十軒ももつていて、家賃が日に五、六、万円も入るといふボスもある。

こうしたボスはアパート経営、パチンコ屋など多角営業でスラムに偶然たる勢力をもち、いさゝんな後継もかねて発言力も強い。

交替で震る野郎

西成脚安の前あたり、イタチが走り回る路地が曲りくねつて、可きまもなくアパートが建ち並ぶ。

ベニヤ板で仕切った三星の部屋。

番灯が二部屋にひとつ。夫婦でモウ拾い直してゐる家族がある。子どもは二人。拾つてきた破い靴は襦袢のアップルトにゐる未亡人に知りくらすで買つてもらふ。上の女の子は中学にはいれがず、ホルモン焼き屋の皿洗ひに行く。

こたりの部屋は主人が盗品を扱つたために刑務所へはいつてゐる。おかみさんは子ども二人を連れて、競輪のヤミ垂券売りをしてゐる。そのとなりは井戸掘りの人足。足をケオして仕事を休んでゐる。おかみさんが、このころはホテルなんか冷房用の井戸掘りが多くて、書き入れどきのなかに休まれて、とくまりに々

屋ではなく、その日の食料を求めろだけにゴミ箱をあさる。たまにあきカンや鉄クズ、古ビンの類を拾つてヨセヤへもつていけばトヤ銭くらひにはなるし、金がなればアオカシ(野宿)もさして苦にならない。

この男たちが通るの姿は惨憺としかいひようがない。めこそ食わず体力が衰えてゐるところへ、強烈なバクダン(×チールアルコールをラムネが水で薄めたもの、コッファ一杯十円の密造酒)をあつるのだから、たちまちくびれてぶっ倒れる。起す水ごとまたのお。

男の孤独地獄

なんどか働いていけるまゝ、たく失うよくなる分水道

ちをこぼしてゐる。

三星の部屋といつても、炊事道具や衣類をおけば二畳くらひくが残りない。そこへふつう四、五人、多いときには、七人が住んでゐる。どうして寝るのかといふと、棚をつりつくし、子どもの寝台まで棚に休つてもまだ満員のときには、交替して寝るのである。

転居の道のはてに 独身者のどんづまり

は浮浪者に近いものになる。仕事らしい仕事はない。いざ仕事をもとるとこない。文字通りの食うや食わず。最後のトヤに住んで、生活のすべてはまぎ拾ひ屋。ど水も湯使をかついで回る正親の拾ひ

のひとつは、ひとりぼ、ちになるといふこのようである。失業、病気、災害、失敗、原因はさまざまとこても、そのとき難いかつた貧乏が、家族を解体しないところだからうじて持ちこたえる程度ならよい。だが一家が解散し、ひとりぼ、ちでとり残されると、その男には生きる目的がなくなつてしまふ。ひとりぼ、ちで、どうにもなれと思つた男は、中小炭鉢や飯場やバタヤを遠れ歩き、スラムにたどりついたころにはその自分ひとり食つて寝るだけ。外に世界になにもない。公園に寝よすが、ボロを着てようかだれもかまらものはなし。問題は、失業にせよ、災害にせよ、病気にせよ、最初の小さな

つぎが、ついに家族の解体をよ
りまてに、国家が、社会が個人にと
って何の力にもなっていないといつ
ことだろう。

西成聯合には男四千三百人、女七
百人の日雇い労働者が登録して
男のほぼ半分はドヤ住まいの独身
なのである。二この全日本自由労働
成分会といつのは組合員の大半が女
といつ妙な組合だ。女には生活があ
る。十円の賃上げでも、年末要求で
も実現がこころ。男の大半は組合運
動みだいな土面割なことより、競輪
のレース、ゼバチンコの入り具合の方
に気がはいる。組合とはまづ生活の
向上をめぐすものなのに、この男た
ちには基礎になる生活がない。

一九六〇。(昭三五)九月、西成愛護
会結成

一九六一、四月、西成愛護会館、東岸

町二一に開設、九月、大阪府労働部

西成分室開設、大阪府警防犯部十

一設置、十月、西成保健所分室、西成

愛護会館に開設

一九六二、二月、看護学部道徳町に開

館、八月、総合社会福祉機関として

市立愛護会館開設(東田町七三の二)

・保健所分室、愛護学園、市立愛護

会館内へ移転、西成愛護会館は市立

愛護会館附設授産場となる。市立愛

護会館(東田町一五の七)の財

団法人西成労働福祉センター開設

・国鉄大阪環状線完全環状運転開始

一九六三、三月、水いりん小、中学校

一九五八(昭三三)四月、売春禁止法
施行、森田遊廓の二百三軒、千六百
人の娼婦が転居した。

一九五六、一億総白痴化、二十八年

テレビの旅送が始まって以来、その

年のずか一五七千台だ、たのが、こ

の年、四十二万台に、一般家庭もさ

ることながら、街頭テレビに人々は

くぎづけとなった。

一九五八、フラフィー、ダッコチ。

んブーム、東京、日劇では、ウエス

タン、カーニバル、が連日超満員。

これらのアームの株を成していたの

は、才で十代の女性。ヤングパワ

ー台頭の時期。

一九五六、経済白書、もはや背後で
はない」と。

開校、市立愛護会館移上、五月、西

成労働福祉センター、四逸学園跡に

移転(東入船町三)

一九六四、三月、環状線新今宮駅城

工

一九六〇、山谷暴動、東京の山谷で

酔っぱらひに對し警官の扱いが乱暴

だと五百人の群衆が交番を取り圍ん

で、さゆざだした。(一月一日)

山谷に三階建のマンモス交番がで

きた(六月二三日)、ドヤ街の住人が

反発し、七月二六日、八月一日に暴

動。

一九六一、堂ヶ崎暴動、東田町某出

前前で六十二才の労働者がタクシ-

にはねられて死亡、警官の配置のま

ずを労働者が追求、日間の暴動、